様式 9-1

小学校への接続期における外国人親子支援のための調査・研究－日本語教育の観点から多文化共生を考える－

武田加奈子（白百合女子大学 文学部 教授）

1. 研究の背景

日本国内の在留外国人数が増加する中、日本語指導が必要な子どもの数も増加している。この現状を解消するには、早い段階からの支援が効果的だと考える。保育園・幼稚園から小学校への接続期の問題解消のためには、外国人の子どもの日本語や、学校に対する予備知識を身につけてもらえるような就学前支援を行うと同時に、彼らを支える保護者、保育者、小学校教諭を含めた４者間の包括的なサポートが必要だ。そこで本研究では、保育園・幼稚園ら小学校への接続期にあたる外国人児童に関わる諸問題の解消を目的としたプラットフォームをインターネット上に構築し、研究成果を公開・共有することで、外国につながる子どもや家庭、その人々と関わるまわりの人たちへ、居住地域に縛られない支援を目指す。

2. 保育者へのアンケート、インタビュー調査の結果

現在どのような問題を抱えているのか、散在地域（在留外国人が集中して居住してはいない地域）の保育園・幼稚園でアンケート、インタビュー調査を行い、具体的な事例の収集をした。協力を得られたのは、保育園 15 園、幼稚園 3 園で、保育者 217 名、施設長 18 名である。

保育者の抱える問題

保育者は外国人保護者とのコミュニケーション手段に問題を感じており、それを解消する手段として「やさしい日本語」を使用していることがわかった。また、問題があると感じている保育者ほど、翻訳アプリなどの他の手段も利用するなどの工夫を行っている。しかし、それでも問題が解決しない（実際に持ち物が揃わない、集合時間に遅れる等）という報告もあり、やさしい日本語への変換に問題があるのか、文化的な違いによるものなのか、更なる分析が必要になる。

外国人保護者とのコミュニケーション時の話題と問題の内容

保育園や幼稚園での保護者とのコミュニケーションは主に降園時に行われ、具体的な問題解決のために写真や実物を活用した対面での対応が行われていた。しかし一方で、実物提示が難しい抽象的な内容（園児同士のケンカ、その日の出来事等）は緊急性がない場合には後回し（回避）されることもある。どの場合でも保育者は基本的に口頭でのコミュニケーションの重要性を感じて行っているが、その背景には国の定める保育指針等があると推測される。保育者は、言葉の壁が取り除かれれば問題も解消すると考える傾向があるが、実際には言語問題が解決しても課題が残ることがあり、その際には文化の違いに原因を求める傾向が見受けられた。その解決策として以下の３つが提案される。

① 保育場面に特化した「やさしい日本語」研修の導入により、言葉への不安を軽減し、伝達力の向上を図る
② 異文化理解プログラムを通じて、各国の子育て観への理解を深め、ステレオタイプ的な見方を見直す
③ 散在地域の保育者同士が経験や工夫を共有できるサポート体制を構築し、孤立を防ぐ

3. 主な実践内容

ホームページの作成

保育園・幼稚園で配布しているおたよりを、外国人保護者にもわかりやすい日本語に書き換え、公開した。また、保育者がダウンロードして利用できるよう、汎用的なサンプルを提示し、語彙も所属園に応じ入れ替えられるようにした。

親子サロンの開催　（毎月１回/全 21 回　参加者：延べ 182 人）

近隣地域に住む外国人親子と日本人親子が子育てを通して知り合い、お互い情報交換ができる場を提供した。またサロンでは、参加者からの生の声を広く収集し、外国人親子支援のニーズの把握を行った。この活動を通じてできたつながりを基盤に、プレスクール開催の準備に着手することができたことは、大きな成果である。

4. 今後の課題

本研究では外国につながる親子の小学校への接続期支援に関する調査・研究を行った。接続期支援としては、当該児への日本語学習を含めた学びの環境を確保することはもちろんだが、子どもを支える家族が感じている不安を理解することも重要だと考える。そのためには、保育施設と義務教育機関の連携が不可欠であり、地域の公的機関の協力も必要である。プレスクールの実施とともに、今回の調査研究、実践で学んだこと、得られた経験をもとにホームページの拡充に努めたい。最終的には、外国につながる子どもたちがほかの子どもたちと同じように自己実現できるような日本社会の実現を目指したい。

共同研究者：井上裕子・栃木亜寿香